

長は初代の小野友道教授（皮膚科学）から木川和彦教授（総合診療部）、興相博次教授（呼吸器内科学）、片淵秀隆（産科婦人科学）と引き継ぎ、現在、馬場秀夫教授（消化器外科、平成二十三年四月）がその任を務めております。

県内の多数の医療機関、指導医の先生方や多くのコメディカル、事務員の方々と協力し、当院の『熊本大学医学部附属病院群卒後臨床研修プログラム』を運営して参りましたが、平成二十二年から新たな研修プログラムを開始しています。厚生労働省の臨床研修制度の見直しにより、昨年従来に比し自由度の高い研修設定や特科コースの設定、選択診療期間の延長が可能となりました。これを受け、当院の『熊本大学医学部附属病院群卒後臨床研修プログラム』も将来のキャリアパスに直結した研修コースの開設など選択枝を増やし、一部には医師不足や偏在への対応を目指した内容となっております。

昨年末、新聞紙上などで、次年度研修医の動向が報じられ、国立大病院、地域病院の苦戦が強調された内容でした。それでも熊本県のマッチング率は二十三年度採用予定で八一%を超え、当院も五十六名の希望者をマッチング登録できました。これは国立大学としてはトップクラスであり、その意味で改訂プログラムは一定の評価を頂いたといえます。もちろん満足といえる現状ではありませんので、今後も引き続き、新人研修医の確保に努め、その育成に長期的な展望を持って研修を進めたいと考えています。

地域医療問題はそのひとつで、医師不足や偏在について研修制度の導入を原因とする声が上がっているのも事実です。従来熊本大学に入局した医師は診療科の

研修後、県内の各医療機関に赴任し、地域医療に携わる役割を担っていたといえます。その意味で当院プログラム修了後の進路が県内医療機関に直接・間接的に影響していくこととなります。平成二十二年度末の研修修了者は五十六名でしたが、その進路としては、八四%が入局し、県外に転出した医師は七名という結果でした。この数字をどのように捉えるかは見解が異なるかと思いますが、県内で医療を継続する医師が当院プログラム修了者の大多数である現況は今後も維持して行きたいと考えています。

一方、長期的に魅力ある研修体制には大学・関連病院の指導医確保と充実が重要であり、当センターで厚生労働省の認可を受けた研修指導医のワークシヨップを企画し、毎年開講しています。平成二十二年は八月末に研修関連病院の医師五十名に二日間受講して頂きました。普段とは違った苦労をおかけしますが、医師教育を考え、研修指導の糧を得るとのご評価を頂き、多数の先生方が厚生労働省からの修了証を手になされています。

今後これら活動を通じて熊本大学および協力病院・施設の研修環境の改善に努め、医師育成・医師確保に一役を担う所存です。これら多くの活動は関係各位のご尽力とご支援あつてのことであり、なかでも公益財団法人肥後医育振興会の皆様の大御支援に改めて御礼申し上げます。

熊本大学医学部附属病院総合臨床研修センター 前センター長 片淵 秀隆

第十一回熊本大学医学部医学科 医学教育FDワークショップを 開催して

本学医学部医学科によるFDワークショップは、二〇〇〇年に第一回が開催されて以来、昨年度で第十一回目を迎えました。第一回のワークショップは市内のホテルで二日間にわたって開催され、尾島昭次医学教育学会会長（当時）、畑尾正彦同副会長（現）、倉本毅高知医大教授（現）をタスクフォースとしてお迎えし、新しいスタイルの医学教育の在り方を学びました。耳慣れない専門用語に戸惑いながらも、ノーネクタイで、すべての参加者を「……さん」で呼び合う職員の垣根を取り払ったバリアフリーなスタイルに新しい医学教育の時代を感じたものでした。

このようなワークショップが開かれるようになった背景には、十数年ほど前から全国的にはじまった医学教育改革があります。従来、我が国の医学教育は各大学の独自性に任ざられてきましたが、近年の生命科学の発展や臨床医学の進歩、あるいは医学・医療をとりまく社会的変化に対応するために、全国共通の医学知識を教育する必要があるという理念のもとで、平成十三年に医学教育モデル・コア・カリキュラムが制定されました。このカリキュラムでは、医学部で習得すべき学習内容の二／三程度をコア化（標準化）するとともに、従来の学問体系別ではなく、統合型（臓器・系統別）カリキュラムとなったことが大きな特徴です。さらに、このような新しい医学教育体制に対応するため、チュートリアル教育やPBL (Problem-based learning) などの

新しい教育手法が導入されました。これに伴い、新しい教育カリキュラムや教育手法を導入するために、医学科教員の教育能力の向上を目的として、全国的にFDワークショップが開催されることになりました。

本学医学科でも、このワークショップでのディスカッションをもとに、様々な医学教育改革がなされてきました。第十一回目を迎えた今回のワークショップは昨年十二月二十五日（土）に学内の総合臨床研修センターにおいて、原田医学部長以下、基礎および臨床の教員三十三名、医学科三年生十一名および事務職員四名が参加して開催されました。学外からの特別講師として、九州大学医療系統合教育センターの吉田素文教授ならびに山口大学医学部総合診療医学分野の松井邦彦教授のお二人をお迎えし、それぞれ「九州大学の医学教育センターの現状と全国の医学教育ユニットの動向」および「山口大学における卒前教育の現状」というタイトルでレクチャーを行っていただくとともに、討論にも積極的に参加していただきました。今回のワークショップでは、十月に設置された「臨床医学教育研究センター」で取り扱うべき課題について討論を行い、本学における医学教育の問題点の洗い出しに始まって、期待されるカリキュラム案や新しい医学教育体制の構築について熱のこもった討論がなされました。とりわけ、学生諸君からの意見や要望には感心させられる点が多く、解決すべき問題点が浮き彫りになりました。三階建ての臨床医学教育研究センター棟の建設も着々と進み、来年二月には竣工予定で、ハード面での充実と相俟って、ワークショップでの討論内容が、今後の医学教育の改善に大いに役立つも